

# 学校支援地域本部事業の導入に当たって

小平市教育委員会教育長 坂井 康宣  
(平成20年4月 校長・副校長合同会議資料)



## 学校支援地域本部事業とは

この事業は、地域全体で学校教育を支援するために、学校と地域との連携体制を構築し、学校を支援する事により、教師の多忙感を減らし、教師が子供と向き合う時間を確保すると共に、子供達の教育を地域力で支えていこうとする、今年度から始まった制度。

ボランティアの学校教育への導入に最近大きな関心が持たれている。

導入段階では参加といわれるお手伝いの段階であるかもしれないが、子供の教育活動をより豊かに、より充実させ、教師の多忙感を解消し、負担を軽減するためには、その関わりを参画にまで高めていきたい。この考えが、小平市教育委員会が平成13年から進めてきた、学校支援ボランティア導入の基本的な考えである。

**参加**・・・学校の行事や教師の授業、様々な教育活動等のお手伝い

**参画**・・・授業や学校行事創りの提案や企画（指導計画創り）、授業展開や行事実施に必要な人材確保、外部組織の支援確保、教材・教員等の確保等

このためには・・・学校支援ボランティアコーディネーターの存在が不可欠

背景は…………いじめ、不登校、問題行動等や、青少年が引き起こす凶悪犯罪、子供を巻き込んだ凶悪犯罪など様々な社会問題の発生

**地域社会においては**・・・地域の教育力の低下、地域社会の安全・安心の問題

**学校教育においては**・・・教師の資質・能力の問題、いわゆる学級崩壊等が指摘される一方、家庭教育の学校教育への一方的な依存。教師の多忙感からくる、教師が子供と向き合う時間が少なくなったという学校現場の実態

実際には **地域の教育力** → 地域の個人的教育力は以前より高い → 高学歴社会  
地域の学びの環境は充実してきている  
公民館活動やカルチャーセンターでの学び  
お稽古ごとやスポーツクラブ

無くなったのは、地域の絆の喪失 地縁的なつながりの希薄化

一方で、個人主義の浸透と関わりを持とうとしなくなった地域社会

学校は依然として閉鎖的であり、教師の姿、子供の姿が地域に見えにくい

敷居が高く、連携といってもなかなか入りにくい

## 学校支援地域本部事業をスタートさせる意義

小平で取り組む教育改革を、競い争う「競争の教育改革」ではなく、共に創造する「共創の教育改革」と位置づけ、「地域で育てよう すこやかな子ども」を小平の教育改革の基調とし、地域が関わり、地域が支え、地域が見守り、地域が応援する、学校と家庭・地域社会の連携の構築を図ってきた。そのために、学校を毎学期1週間始業時から終業時まで全日公開する事と学校支援ボランティアの積極的な導入、ボランティアの資質・能力の向上を目指したステップアップ研修、ボランティアコーディネーターの養成を進めてきた。

**学校支援ボランティア**      ゲストティーチャー  
   アシスタントティーチャー  
   ボランティアコーディネーター

このような考えから、子供たちが6年間通う小学校を地域コミュニティの核と位置づけ、希薄化した、絆の喪失した地域社会の人々の心を繋ぎ、地域コミュニティを再生させ、地域社会の基盤整備に連なる改革と位置づけ、学校を支える地域づくりに取り組んできた。

## 学校が地域にできるボランティア活動

地区青少対活動（子供会活動）への教員・子供の積極的参加・参画  
福祉活動ボランティア      社会福祉協議会のバザーのお手伝い  
   高齢者交流室でのお年寄りとの交流活動  
   学校に地域の高齢者を招いての交流会  
   赤い羽根募金活動  
   団地の高齢者の自宅のゴミ出し（通学途中）  
   地域のゴミ拾いボランティア（通学途中）  
環境調査ボランティア      空気中の浮遊物質の市内の定点観測  
商店街活性化ボランティア      小平よさこいの地域活動  
市や福祉施設、自治会、商店街等のイベントへの積極的なボランティア活動と参加

## 今後の課題（より一層の充実を目指して）

- ボランティアコーディネーターの養成と学校支援ボランティアの活動の幅の拡大と内容の充実      コーディネーター養成講座  
   ボランティア活動ステップアップ研修  
   多彩で多様なボランティア活動拡大研修
- 教師のための、学校支援ボランティア活用研修会の実施

## 学校と家庭・地域社会の連携を一層進めるために

コミュニティ・スクールを核とした放課後子ども教室、学校支援地域本部事業の組織的取り組みを構築していく。

地域総ぐるみの組織的取り組みの一つの例として、「〇〇小地区地域教育協議会」の設置等が考えられる。